

草庵仏教

第214号
(発行日)

2008年4月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/~souan

《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日午後2時

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日および12日
午後3時より。

○ 真宗共学会――毎月2日と
12日。午後7時より。

* 8月22日同朋の会および8
月12日念仏座談会は休みます

お念仏の普遍性

「救い」とか「さとり」とかを実現する宗教行は大きく分けて三つあると言われてい

る。一つは祈りである。神に祈

る行いによって、神と人とが

であい、交わり、結びつく。キリスト教の修道院での厳しい生活では祈りの行が一日に何度も行われ、夜中でも神への祈りが捧げられると聞く。

イスラム教でも信者の一番大事な勤めは祈りであろう。

二つには、坐禅や瞑想である。インドの宗教はここにこ

れが発達した。身体の姿勢を正し、呼吸を整え、心を散らさないように一つに集中するように訓練する。それによつて真実をさとするのである。

三つに、称名である。仏や菩薩や神の名を称える行である。

この三つのうちで、いつでもどこでもだれでも出来る宗教行は称名であろう。神への祈りも、人混みの中を歩いて

難しいし、電車の中で祈るとも難しい。また坐禅をくむにはあいている時間や静かな処が必要である。しかるに称名はいつでもどこでもだれでも称えられる。

称名行もいろいろあつて、南無阿弥陀仏はその代表的なものである。ほかには南無釈迦牟尼仏とか南無観世音菩薩、あるいは南無妙法蓮華経や南無大師遍照金剛もある。東方のキリスト教では「キリエ・エレイソン」と称える宗教行がある。

かつてプロテスタントの橋本鑑牧師は真宗の影響を受けて「インマヌエル・アーメン」と称える行を実践したという。またカトリックの井上洋治神父はこれも浄土教からの影響で「南無アツバ」と称える行を実践されているようである。

あるいはヒンズー教で、「ラーム」という神の名を称える修行もあると聞く。

こうした世界の称名行の中で、なんといつても広く流布しているのは南無阿弥陀仏の称名行で、これは現在でも、日本はもとより中国・朝鮮半島・台湾ではよく称えられ、ベトナムやチベットでも称えられている。

称えやすいという面もあるが、南無阿弥陀仏は、普遍的な宗教的真理を表した言葉であると思う。

なぜなら、阿弥陀とは原語はアミターユスあるいはアミターバというサンスクリットの言葉の音訳であり、その意味は、はかりなきいのち(アミターユス)であり、はかりなき光(アミターバ)である。阿弥陀とはまさに、はかりないいのちと光なるものの意味である。これは無限者としての神や仏の本質そのものである。神とはなんぞや、仏とはなんぞやといえ、その基本的な性質ははかりなき光といのちといひ得るからである。

また南無とは梵語のナマスで、敬う、礼拝する、帰依する、順う、信じるなどの意味である。

だから南無阿弥陀仏とは、阿弥陀に南無すること、

はかりなきいのちとひかりなるもの(仏)を敬い信じますという意味が言葉の上に表されている。これは人間が無限なるものに帰依する宗教心のおのずからなる態度である。

そうするとさまざまな神や仏や菩薩や経典の名があり、その名を称える称名あるいは唱題があるなかで、はかりなきいのちとひかりという無限なる真実そのものの性質を名にしているのが阿弥陀の名であり、その阿弥陀に帰依することを表す南無阿弥陀仏の称名は宗教的真理を端的に表現する行為であり、その名を称える称名行は、普遍的な実践的意味をもつ行といえないであろうか。

そして、そういう南無阿弥陀仏の普遍性が、さらに無限者そのものが南無阿弥陀仏と、私たちに救済意志を表現して行く行とまで、その深い意味が徹底されているのが、真宗の南無阿弥陀仏の御名なのであつて、この御名を称え、御名を聞くところに無限者にあうことができるのである。(了)

正信偈に学ぶ問答

(一一)

法蔵菩薩因位時

在世自在王仏所

親見諸仏浄土因

国土人天之善悪

建立無上殊勝願

超発希有大弘誓

(正信偈書き下し)

法蔵菩薩の因位の時、世自在王仏の所にましまして、

諸仏の浄土の因、国土人天の善悪を親見して、無上殊勝の願を建立し、希有の大弘誓を超発せり。

(現代語訳)

法蔵菩薩の因位のとときに、世自在王仏のみもとで、仏がたの浄土の成り立ちや、その国土や人間や神々の善し悪しをご覧になって、この上なくすぐれた願をおたてになり、世にもまれな大いなる誓いをおこされた。

A 「仏説無量寿経には法蔵菩薩の願行はどのように説かれ

ていますか」

D 「それは

時に国王ましましき。仏の説法を聞いて心に悦予を懐き、すなわち無上正真道の意を發しき。国を棄て、王を捐て、行じて沙門となり、号して法蔵と曰いき。

(そのとき一人の国王がいた。世自在王仏の説法を聞いて深く喜び、そこでこの上ないさと

りを求める心を起こし、国も王位も捨て、出家して修行者となり、法蔵と名のつたと説き始められています。法蔵菩薩はもと国王であつて、世自在王仏の説法をお聞きになつて、国を棄て、王をすて、沙門となられた、といわれて

ています」

A 「沙門とは」

D 「出家して真実を求めるお方のことです」

A 「国王であつた方が沙門となつて真実を求められた、といわれる意味はなんでしょうか」

D 「国王というのはこの世での最高に幸せな境遇を意味していると思ひます。富と権力と名声と権威という、この世の宝を独占的に持っている人のことでしょう。

いわば、多くの人が求め、あこがれ、追いかけている宝を一身に保持している方を象徴しています」

A 「なぜ国王の地位を棄てられたのですか」

D 「それは、世自在王仏の説法を聞いて、この世の宝の限界を知り仏法はそうした宝を超えた価値のあることを自覚され、国王として所有しているこの世の宝のすべてを棄ても悔いしないのが仏法であることを示されるのであります」

A 「富とか権力とか名声とか権威などというこの世の宝は無用なものでしょうか」

D 「そうは思いません。むしろこの世の中で大きな力をもっていると思ひますし、ことに財物は人生生活にとって生活の基礎になるものですね。決して軽んじられるものではありません。ただし、これらのものは自己自身にとつては外なる物ですから、外なる物

を中心にして生きるならば、外なる物にふりまわされて、動転して苦しみ、不安は去らず、むさぼりや他との争いなどの汚れがつきまどつてくるのではないのでしょうか。ですから国王というのは富とか権力とか名声とか権威とか享樂など、そういう自己にとつて外なる宝を中心にして、それを独占的に所有しているような人を表しているといえるでしょう」

A 「法蔵菩薩が国と王を棄てられたのは深いいわれがあるのですか」

D 「そうですね。この世の宝を求め、寄りかかる人生には苦悪がなくならないので、人間がめざす方向は、国王のような状態を求めるのではないことを、法蔵菩薩ご自身のすがたによつて示していると思ひます」

A 「ところがわれわれ凡夫は法蔵菩薩が棄てられた国王のようない方々を求めて、少しでもそういう状態に近づきたいと思つて生きていますね。これはいつの時代でも人間のすがただと思ひます。法蔵菩薩がそういう立場を棄てられたのは、この世のそうした宝を求める方向には人間

の根本問題は解決しないからなのです。ではなぜ、世間の宝を求める方向だけではまことの安らぎとか正しさは生まれてこないのでしょうか」

D 「この世の宝は無常であつて、失う事への不安がつきまといひます。そしてこの世の宝は死によつてすべて自分から奪われていきます」

A 「富み栄えることはできても死なないわけにはいかないですね。富も権力も名声も縁によつて失うのです。財産は社会の変動によつて、失うことがよくありますし、地位も権力も失墜しやすいものです。名声も一度の失敗で失うことがよくありますね」

D 「さらには、世間の宝を多く所有することは他の人々の怨みや嫉妬や追い落としや攻撃の対象となりかねません。お互いの争いの種になりやすいです。多くの人がそれを欲して得ようとしているのがこの世ですから。ですから富を独占する王がいることは収奪される貧しい多くの人々を生み出します。国単位でいうと、富を占有する豊かな国があることは多くの貧しい国が生まれるのではないのでしょうか。

雑記帳

このことは現代でも同様だと思えますが」

A 「そうですね。そして富や権力を持つている人は怨みやねたみやときには攻撃の対象となりやすいですね」

D 「ですから王は常に身の安全を確保するために武力でもって守らねばなりません。現代でも金持ちにはガードを固めないで安心して眠れません」

A 「たしかにこの世の中はこういう宝をめぐっての争いがたえないですね。王はしばしばは争いの渦中に立たされま

すね。この世の宝に対して、仏法は世の中の宝を超えた価値があるのですね」

D 「富も権力も名声もこの世かぎりの価値で、仏法は永遠に滅ばない価値でありましょう。死ぬことによって奪われないまことの宝です。仏法ははかりなき光でありのちであって、それは私と決して離れない、むしろ私の主体となつて下さるまことです。ですから仏法は私からなくすることも奪うことも減じることもしできない真実であります」

D 「富も権力も名声もこの世かぎりの価値で、仏法は永遠に滅ばない価値でありましょう。死ぬことによって奪われないまことの宝です。仏法ははかりなき光でありのちであって、それは私と決して離れない、むしろ私の主体となつて下さるまことです。ですから仏法は私からなくすることも奪うことも減じることもしできない真実であります」

A 「それで、法蔵菩薩が『国を棄て、王をすて』たといわれるのは、国王のような立場

をすてて『無上正真道』を求められたのですね」

D 「ええ、世俗の最高価値を身に備えた立場である王を棄てたということは、世俗の価値を得ても、真の安らぎも歓喜も利他の道も実現してこないことを表されたのでありましょう。こういう世俗の宝をすべて棄てても悔いない道、それが無上正真道といわれる

この上ないさとり道であり、その道を求める心いわゆる無上菩提心をおこされたのが法蔵菩薩でありましょう」

A 「無上菩提心とは」

D 「はかりない光でありはかりないのちのまことの徳を成就し、他の生きとし生けるものもこの徳にあずからしめたいという広大な心でしょう」

A 「はかりない光といわれる光とはなにですか」

D 「浄らかな真実の智慧と慈悲の徳とっていいと思えます」

A 「はかりなきのちとは」

D 「智慧と慈悲が無量であり無辺であって滅びることのない力とっていいのではないでしょうか」

(了)

現代の日本人がお念仏の教えを信じることは非常に難しいことかも知れない。お念仏の教えそのものは至って単純であるといえるが、それを受け入れるにはいろいろな壁がある。

まず近代の日本において仏教はずっと疎外されてきた。明治になつて廃仏毀釈、さらに国家神道の強制、戦後は経済一辺倒である。日本の指導者層なり知識人は宗教を重要な領域だとは理解しないし、また宗教教育は公教育から排除され、宗教は個人の関心事にまかされている。

マスコミも宗教にはほとんど立ち入らない。要するに日本では宗教は個人の趣味や嗜好と変わらないもののように扱われている。しかも、戦後、さまざま

新しい宗教が生まれ、現在もつぎつぎといろいろな宗教まがいのものが生まれている。多くは現世利益中心の宗教であつて、

宗教の本質からは逸脱したものが多し。こんないろいろな宗教が発生する国は日本だけと聞いている。このことは日本人が宗教に対する知見が貧弱である

という反証でもあろう。また宗教に熱心であると「あの人は宗教にこつている」とやや特別な目で見られる。その一因は熱心な人の多くは新興宗教に入っている人であるという現実がある。

仏教は、江戸時代の初めから徳川幕藩体制によって抑圧され、明治以後には国家神道の下に置かれ、戦後は科学技術と経済の中心主義によって疎外されて今に至っている。ことに日本の指導者層には仏教信仰は極めて薄い。そして仏教にたいする、もつと言えれば宗教に対する理解のレベルは低く、中学や高校で習った程度の知識しかない場合が多い。だからといって彼らが確かな世界観や人生観をもっているかといえ、そうは思えない。

「わたしの人生は一回だけで、死んだら終わり。だから生きていくうちに、楽しいこと、心地よいことをするしかない。そして人に迷惑を掛けないように生きていけばそれでいい」という程度のもので、感じられる。指導層や知識層がこのようであるから、われら一般大衆は右へならえである。世間の風潮や大多数の考えに流されてしま

う。もちろん世間の動向や風潮に左右されやすいのはこの国において同様であり、いつの時代でもそうなのであるが。「赤信号、みんなわたればこわくない」で、周りの大勢の人の考えで生活していけばいいのだという。かつて日本人は時代の流れのままに流されて戦争に突入した苦い経験がある。

こういふ現代の状況の中で、仏教の話を聞いて、今までの考えをさしおいて仏の教えに信頼し順つて生きようとするのは、易しいことではない。仏教の教えに関心が生まれて、「仏教で、なかなかいいものだ」と思うようになつても、すぐに真宗念仏の話に心を寄せるようになるものではない。真宗までたどり着く前に人生が終わつてしまうことも多い。真宗を聞き始めても、真宗の心が自己に確立するまで聞きつけることがまた容易でない。なぜなら傲慢心が立ち上がるからである。そうなる単純に念仏を信じて、如何に容易でないか。それでも「人生というものはお念仏を申さずには生きられないものである」ということは確かである。だからお念仏を申し信じて、自然なことであるから易しいといえ、易しいといえる。

(了)

信心夜話

《松並松五郎念仏語録を読む》二
太字は松並さんの言葉。

○落ちると見込んで下されたのも仏様なら、その者を助けると成就して下さったのも仏様なり、南無阿弥陀仏なり。

箸持つ世話もいらぬ。口にねじこんでももうていながら、いるのに吐き出す。
とにも角にも今の我が身の仕合せを仰ぐばかり。

（自分の自己批判や反省は、知性の働き。知性では「落ちる」とは知れぬ。我が心では落ちると知れぬ。いつかは知れると思うけどいつまでも知れぬ。「落ちる機ぞ」と知らせてくださるのは「タスケル」と仰せ下さる南無阿弥陀仏のお心から。大悲のお心を聞く中に、「落ちる汝ぞ」というお知らせを一生聞かせていただく。「タスケル」とは助からぬ機、落ちる機を助けたもう仰せ。聞いても聞いても「落ちる機」にはなれぬ、落ちる機と自覚できぬままが落ちる機、その機に「タスケル」との仰せを仰ぐばかり。そんな念仏さえいやがって念仏をしぶるしぶとい私に、仏様の方から私の口にねじ込んで聞かせてくださる南無阿弥陀仏。）

○一杯二杯の酒は私のがのむ。だんだんのめば酒が酒をのむ。それがまた深くのめば、酒が私の全体となる。

お念仏も初めは私ができる。それがだんだん進むと念仏が念仏を呼ぶ。それが深くなると、自分全体がお念仏に動かされると、からめ取られる。然し世渡りの中にも、火もあれば川もある、山また谷もある。それにおぼれぬ様に付いて、付きずめになし下されるお姿が南無阿弥陀仏と、この口に現に聞こえて下さる仏様が、南無阿弥陀仏にてまします。

（酒が酒を飲む。酒が私の全体となる。自分全体がお念仏に動かされる、とのこと。松並さんのお念仏の浸透度の深さはうかがい知れない。阿弥陀様がいつも付いてくださり、おぼれぬように護っていてくださる、その阿弥陀様が南無阿弥陀仏と始終口に現れてくださる、有難うございます。）

○聞くとは、今なり、正なり、真なり、用なり、受なり、従なり、随なり、順なり、実なり、行なり、ここをもつて、仏願の生起本末を聞いて疑の心あるべからず、これを聞くとゆう。

（仏願の起りりと結果を聞いて聞いて、それが外ならぬ今の私のためであつたと、まっすぐにまことを用い、受けとりしたがう、そのままが念仏

の実行におのずとなりゆく。なおなお聞きたきは仏願の生起本末である。）

○ある布教師「私は温かい念仏は出ぬ」と。

冬の寒い日に、ふるえて帰って来た。こたつがあるからここへ入れと言われて、こたつに入る。ああ温かいと五・六分後温かくなつた。
温かくさせた光を忘れて、即ち温かくなる力はこたつにある事を忘れて、こちらが温かくなろうとする。

南無阿弥陀仏の温かさを、自分から出そうとするから、間違いが起きる。皆は有難い念仏になろうとするが、そうでない。お念仏が温かいのです。

こたつにずーと入って居れば温かいのに、出ている方が多いので、何時までたつても温かくならぬ。いくら念仏が温かくても、入らねば温かくならぬ。念仏にはまれば、ほのぼのと温かくなる。私は寒い。

（温かいこたつに入ろうとせず、自分で自分を温かくしようとする。私の心はどこまでも寒い。ただこたつが温かい。それを知らずに、すぐこたつを出て、いつか自分が温かくなろうとする。しかしなれぬ。私は温かい念仏のこたつにじつと入っていれば温かくなれるのに、すぐ出てしまふ。お念仏の妙徳を知らず、また自分の心の自性を知らないからである。）

○私の心は変わりずめである。変わったら変わったまま、善い心の出てる筈がない。しかしそれで仏様の御見抜き通りやそうです。

（変わりずめのあてにならない心であり、しかも善い心の出てる奴ではないと、すでに見抜かれてはいるにもかかわらず、性懲りもなしにこの心に相談をかけている。それで南無阿弥陀仏のご恩に心がよらぬ。）

(了)

《お休みのお知らせ》

4月12日(土)

念仏座談会と共学会は休みます。